

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 27 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25360002

研究課題名(和文) 軍事と外交から見るソ連の帝国建設：カリム・ハキーモフ(1892-1937)の研究

研究課題名(英文) Making an Anti-Imperialist Empire: A Biography of Karim Khakimov (1892-1937)

研究代表者

長縄 宣博(NAGANAWA, Norihiro)

北海道大学・スラブ・ユーラシア研究センター・准教授

研究者番号：30451389

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、タタール人革命家でソヴィエト外交官のカリム・ハキーモフ(1892-1937)の伝記的研究を通して、中央アジアの内戦で「反帝国主義」のスローガンを掲げ現地民の支持を得ようとしたボリシェヴィキの奮闘こそが、初期ソヴィエト外交(とくに対イラン、サウジアラビア、イエメン)を形作ったことを解明した。しかも、「反帝国主義の帝国」ソ連を支えた制度や実践が、実は帝政期からの遺産に多くを負っていたことも明らかになった。本研究は、モスクワ、ウファ、ロンドンの文書館を中心に未公開史料を博捜することで新しい研究領域を開拓し、関連する国外の研究者とも協力しながら、積極的に成果を海外に発信した。

研究成果の概要(英文)：Karim Abdraufovich Khakimov was a Muslim intermediary who played a leading role in extending Bolshevik power into Central Asia and contributed to forging the early Soviets' diplomacy in Iran, Saudi Arabia, and Yemen. My biography project illuminates a seamless transition from the Civil War in the Muslim borderlands to the early Soviet engagement with the Muslim world beyond the borders: it was the struggle to procure local Muslim support amid the Civil War that shaped the Soviet Union as an anti-imperialist empire. This project enriches the Russian historiography by probing the impacts of the Bolshevik Revolution on the world and Russia's persistent patterns of interplay with the Muslim populations, both inside and outside. It helps to see Russia's imperial continuum from the tsarist empire to the USSR. Based on multi-archival pursuit, it produced internationally recognized works that would facilitate dialogs among students of modern empires, Central Eurasia, and the Middle East.

研究分野：中央ユーラシア近現代史

キーワード：帝国 ソ連 中央アジア 中東 革命 国際関係史 軍事史

1. 研究開始当初の背景

近年進展著しい帝国研究は、限られた人材と資源で広大な版図を統治するには現地民の協力が不可欠であり、支配者も現地民協力者や仲介者を用いて地元の政治の枠組みの中で行動しなければならなかったことを解明している。そしてそれは必然的に、帝国権力と現地民社会を媒介する具体的な個人に対する関心を高めることになっている。折しも近年、歴史学で伝記研究の有用性が見直されている。『アメリカ歴史評論 *American Historical Review*』2009年3号の特集に見られるように伝記は、個人の深い内面を掘り起こす文学的な探求ではなく、ある人物の生涯を時代や文化の結節点と捉え、かつ彼・彼女がその時代と文化の形成にどのように参加していたのかを実証する方法として注目されているのだ。

本研究がタタール人革命家・ソヴィエト外交官の伝記という方法を探るのも、まさにそれによってソ連という帝国の建設を「虫の眼」のレベルで実証できることが期待されたからだ。そしてそれは、これまで別個に研究されてきた内戦と初期ソ連外交を一続きの連続体として捉え、その意味を考察することで、戦間期の世界におけるソ連の位置づけに新たな光を当てることが展望された。

2. 研究の目的

本研究は、カリム・ハキーモフの伝記的な研究を通じて、中央アジアの内戦と初期ソ連の中東外交を連続的に捉える視座を提供し、戦間期の国際秩序の形成をローカルな観点から分析することを目的とした。そのためにまず、地域・民族ごとに分断されている内戦史を帝国再建過程として読み解こうと努めた。そして外交史としては、ロシア研究と中東研究を融合させて、列強の競合と地域のアクターとの相互作用から世界秩序の生成を理解する方法論を鍛えるべく努めた。本研究は、帝国論、中央ユーラシア研究、イスラーム地域研究など様々な研究プロジェクトとも連結し、他分野間の対話を促す触媒としての役割も果たすことを目指した。

3. 研究の方法

本研究では、カリム・ハキーモフの人生を軸に、彼が駆け抜けた中央アジアの内戦と、対イラン・サウジアラビア外交の文脈を復元することに力を注いだ。その際、地域間比較と地域間の相関分析が重要な方法となった。内戦研究としては、これまで地域・民族ごとに蓄積されてきた史料集や研究書（本研究ではヴォルガ中流域、ウラル山脈南部、トルキスタン）をポリシェヴィキによる帝国再建過程として読み直した。外交研究では、帝政期以来ロシアとの結びつきの強かったイラン北部と大英帝国の勢力圏にあったアラビア半島西部を取り上げることで、ソ連が「非公式帝国」をつくろうとする中で直面した困難

を比較対照した。また、関係諸国の高官間の交渉ではなく、具体的な地域で展開される列強の競合に注目することで、地域秩序あるいは世界秩序の生成において現地のアクターが果たした役割を重視する方法論を鍛えた。

ハキーモフの出身地はバシキール自治共和国内に入っていたので、スターリン批判後、彼はバシキール人の革命英雄として顕彰され、1966年にバシキール語の伝記（1977年にロシア語版）がウファで出版されている。本研究は、そこに示されている史料を足掛かりに新史料を博捜し、現在の史学史的状況の視角から読解した。本研究では、モスクワの四つの文書館、ウファの二つの文書館、ロンドンの大英図書館にあるインド省文書を用いた。その他、内戦期に赤軍が出していたタタール語の新聞と出版物について、モスクワのロシア国立図書館ヒムキ分館とカザン連邦大学図書館で調査を行った。

4. 研究成果

(1) 平成25年度

25年度は、国内外の研究者との意見交換を通じて、本研究をより広い文脈に位置づける条件を整えた。8月に大阪で開催されたスラヴ・ユーラシア研究東アジア大会では、「反帝国主義と帝国の遺産：ポリシェヴィキの中東への関与」というパネルを組織した。そこで研究代表者は、紅海東岸での英ソの競合、それを利用するサウジアラビアとイエメンという文脈にハキーモフの活動を位置づける報告を行った。これを契機に、サンクトペテルブルグ・ヨーロッパ大学のサミュエル・ハースト氏（ソ連・トルコ関係）、マンチェスター大学のデニス・ヴォルコフ氏（ロシア・イラン関係）、広島市立大学のヤロスラフ・シュラトフ氏（日ソ関係）と共同研究を進めることになった。また、史学会の公開シンポジウム「帝国とその周辺」で「協力者が攪乱者か？ロシア帝国のタタール人」という報告を行ない、ハキーモフの足跡を「帝国の遺産」の中に位置づけた。

25年度はウファでの資料調査で成果があった。その際、現地の研究者との協力が不可欠だった。とりわけ、バシコルトスタン共和国中央歴史文書館に所蔵されている、ハキーモフの生涯にわたる文書群（f. R-4771）が予想以上に豊かだった。この調査で、ハキーモフのタシュケントとブハラでの活動をより深く研究するヒントを得た。また、ハキーモフの生村にある博物館も訪れ、貴重な写真を複製できた。本研究は新史料の博捜を重要な方法に掲げていたので、今後は本研究で収集した資料を提供することで、地元の研究成果を還元することも考えている。

(2) 平成26年度

26年度も国際的な業績作りと史料収集の両面で大きな成果があった。6月末と7月頭にそれぞれワルシャワとロンドンで第一次

世界大戦関連の国際会議で報告し、これと合せて大英図書館のインド省文書の調査を行った。10月にはカザンとモスクワでロシアのイスラームに関する国際会議に参加し、タタール語文献の豊富なカザン連邦大学図書館に加え、ハキーモフのタシュケント時代についてモスクワの軍事文書館で調査を行った。11月の北米のスラヴ・ユーラシア学会では、1920年代後半のソ連のメッカ巡礼事業を帝政期との連続性と新しさの観点から報告した。12月にはウファで、ハキーモフ生誕125周年の国際会議が開催され、そこで基調講演を行うことができた。

史料調査の最大の成果は、イラン北東部のマシュハドで総領事だったハキーモフの足跡をインド省文書で辿れたことだ。そこからは時期によっては、ほとんど週単位でハキーモフの動静を知ることができた。ハキーモフの経歴の中でマシュハドとラシウトで総領事として勤務した時期（1921-1924年）は謎が多く、ロンドンでの調査は従来の空白を埋める第一歩となった。またカザン連邦大学図書館では、内戦期に赤軍で印刷されていたタタール語の出版物を集めた。モスクワの軍事文書館では、前年度のウファでの調査ノートを基に、1920年にオレンブルグからタシュケントに移ったハキーモフが勤務したトルキスタン方面軍政治部の文書を閲覧した。ここでは、ハキーモフが現地民から赤軍を組織する際の政治教育で中心的な役割を果たしていたことが、従来知られていない文書とともに確認することができた。

（3）平成27年度

国際的な業績としてはまず、スラヴ・ユーラシア研究センターの夏期シンポジウム「ロシアとグローバルヒストリー」で組織の中核になったことの意義は大きい。この研究集会には、8月に幕張で開催された国際中東欧研究協議会第9回世界大会に合わせて来日したベテランと新進気鋭の歴史家を招待できた。現在、国外の出版社から英文論集を出す計画を進めている。幕張での国際会議でも、パネル「戦間期アジアにおけるポリシェヴィキ：反帝国主義の帝国建設？」を組織し、極東とトルコの事例を含めることができた。

史料調査の最大の成果は、モスクワの三つの文書館（外交史料館 AVPRF、経済文書館 RGAE、社会政治史文書館 RGASI）で行った調査から得られた。その際、二つの目的があった。第一に、イラン北東部のマシュハドで総領事だったハキーモフの足跡（1921-1923年）について、大英図書館のインド省文書で得た情報とソヴィエト政府側の記録を対照させること。第二に、ハキーモフのブハラ勤務時代（1920年9月から1921年6月）に関する情報を増やすことである。第一の目的について、当時外務人民委員（外相）だったチチェリンの官房の文書（AVPRF, f. 04）そして対外通商人民委員部の対イラン貿易の文書

（RGAE, f. 413）は、イギリス側の情報を補強し、さらにソヴィエト側の意図を読み取れたという意味で極めて有意義だった。第二の目的については、RGASI 所蔵の党中央委員会の中央アジア局（f. 61）とコミンテルンのトルキスタン局（f. 544, op. 4）の文書が重要だった。とりわけ後者には、中央アジアの内戦に関する従来の研究で十分に注意が向けられなかった文書が大量に収められていることに気付いた。その一つの論点が、現地民知識人とポリシェヴィキを仲介した越境的なタタール人革命家の存在だ。ハキーモフは例外的な個人では決してなく、まとまりのある集団と現象を体現した個人なのだとその確信をここで得ることができた。

（4）平成28年度

現在、岩波書店から『ロシア革命とソ連の世紀』全5巻の刊行が予定されているが、その第5巻『越境する革命と民族』に収めるべく、「反帝国主義の帝国：イスラーム世界に連なるソヴィエト・ロシア」という論考を執筆した。これは、ハキーモフがオレンブルグ、タシュケント、ブハラ、マシュハド、ジッダと転任する軌跡の背後に、中央アジアのムスリム地域を再征服する内戦と反帝国主義のソヴィエト外交（モスクワを頂点とする非対称な同盟の構築）が継ぎ目なく連続するダイナミズムを読み取るものである。つまり、中央アジアの内戦で「反帝国主義」のスローガンを掲げ現地民の支持を得ようとした奮闘こそが、初期ソヴィエト外交を形作ったのである。そして、そのダイナミズムを支えた制度や実践が、実は帝政期の遺産に多くを負っていたことを明らかにした。この論文は平成29年秋に刊行される。

本研究の全体像をまとめる作業から浮かび上がってきたのは、ハキーモフの中央アジア時代についてより深く探究する必要があるということである。とりわけ、帝政期に徴兵対象ではなかった現地民からどのように赤軍が作られたのかという問いは、本研究が今後展開しうる新しい方向の一つを示している。このような判断から、モスクワの二つの文書館（RGVA と RGASI）で改めて調査を行った。2015年に出たアディーブ・ハリドの著書『ウズベキスタンの形成』は、ソヴィエト政権成立における現地民知識人の役割を強調するものであり、ポリシェヴィキの仲介者としてのタタール人革命家にほとんど注目していない。しかし本研究で明らかになったのは、1920年9月頭の革命から1921年春までのブハラ人民ソヴィエト共和国において、現地民知識人とタタール人要員との権力闘争が極めて激しかったということである。現在、この成果を論文にまとめる作業に着手しており、2017年11月に北米のスラヴ・ユーラシア学会で草稿を発表する。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

Norihiro Naganawa, "Transimperial Muslims, the Modernizing State, and Local Politics in the Late Imperial Volga-Ural Region," *Kritika: Explorations in Russian and Eurasian History* 18, no. 2 (2017)印刷中。査読有

Norihiro Naganawa, "A Civil Society in a Confessional State? Muslim Philanthropy in the Volga-Urals Region," in Adele Lindenmeyr, Christopher Read, and Peter Waldron, eds., *Russia's Home Front in War and Revolution, 1914-1922, Book 2: The Experience of War and Revolution* (Bloomington: Slavica Publishers, 2016), 59-78. 査読有

[学会発表](計15件)

Norihiro Naganawa, "A Conservative Adaptation to Modernity? Abd Allah al-Maadhi Goes to Hajj in 1910" at Central Eurasian Studies Society Regional Conference, Kazan Federal University, Kazan, Russian Federation, 2 June 2016.

Norihiro Naganawa, "An Imperial Pathway: Karim Khakimov in the Southern Urals, Turkestan, and Iran (1919-1921)" 国際中東欧研究協議会(ICCEES)第9回世界大会、神田外語大学(千葉県・千葉市) 2015年8月7日。

Norihiro Naganawa, "Russia's Place in Global Muslim Connections, ca. 1800-1930: Sufism, Nationalism, and Anti-Imperialism" at 2015 Summer International Symposium of the Slavic-Eurasian Research Center, "Russia and Global History" (30 July 2015, Sapporo, Hokkaido). シンポジウムの組織も担当

«антиимперской
» //

конференция «Р

сотрудничества».

4 2014

Norihiro Naganawa, "A Biography of Karim Khakimov as a Means of Studying an 'Anti-Imperialist Empire'" at the Plenary Session of the International Academic-Practical Conference "Russia and Asian Countries: Vectors of Interactions and Collaboration," The City Conference Hall, Ufa, Russian Federation, 4 December 2014.

Norihiro Naganawa, "Invitation to Guests of God: Bolsheviks' Transnational Hajj Enterprise," at the 46th Annual Convention of Association for Slavic, East European, and Eurasian Studies, San Antonio Marriott Rivercenter (San Antonio, Texas, USA), 20 November 2014.

Norihiro Naganawa, "Designs of *Dār al-Islām*: The Tatar Public Discussing the Muslim Administration, 1905-16," Eastern and Central European Empires, Nations, and Societies on the Verge of World War I (social imageries of Europe, freedom, future and national communities in 1914), Instytut Historii Polskiej Akademii Nauk, Warsaw, Poland, 25 June 2014.

長縄宣博「協力者か攪乱者か? ロシア帝国のタタール人」史学会公開シンポジウム、東京大学本郷キャンパス(東京都・文京区) 2013年11月9日(その要旨は、『史学雑誌』第123編第1号、2014年、117-118頁)

Norihiro Naganawa, "The Red Sea Becoming Red? The Bolsheviks' Commercial Enterprise in the Hijaz and Yemen, 1924-1938," at the 5th East Asian Conference for Slavic Eurasian Studies, 大阪経済法科大学(大阪府・八尾市) 2013年8月10日。

[図書](計6件)

宇山智彦、半谷史郎、高尾千津子、小野容照、吉村貴之、長縄宣博、地田徹朗、塩川伸明、小森宏美、高倉浩樹、光吉淑江、青木雅浩、平山陽洋『越境する革命と民族(ロシア革命とソ連の世紀5)』岩波書店、2017年出版予定。

小松久男、赤坂恒明、秋山徹、新井政美、磯貝真澄、稲葉穰、小笠原弘幸、川口琢司、近藤信彰、坂井弘紀、塩谷哲史、島田志津夫、清水宏祐、清水由里子、菅原睦、鈴木宏節、永田雄三、長縄宣博、野田仁、濱田正美ほか8名『テュルクを知る60章』明石書店、2016年、133-137, 138-142, 277-281頁(総384

頁)。

小澤実、長縄宣博共編著『北西ユーラシア歴史空間の再構築：前近代ロシアと周辺世界（スラブ・ユーラシア叢書12）』北海道大学出版会、2016年、総314頁。

山根聡、長縄宣博共編著『越境者たちのユーラシア（シリーズ・ユーラシア地域大国論5）』ミネルヴァ書房、2015年、総233頁。

橋本伸也、梶さやか、小森宏美、磯貝真澄、伊藤順二、巽由樹子、福島千穂、今村芳、長縄宣博『ロシア帝国の民族知識人：大学・学知・ネットワーク』昭和堂、2014年、294-316頁（総345頁）。

So Yamane and Norihiro Naganawa, eds., *Regional Routes, Regional Roots? Cross-Border Pattern of Human Mobility in Eurasia* [比較地域大国論集14] (スラブ研究センター、2014年) 総109頁。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

長縄 宣博 (NAGANAWA, Norihiro)

北海道大学・スラブ・ユーラシア研究センター・准教授

研究者番号：30451389